



280号
2023/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



2023年

明けましておめでとうございます

盛装したギャロン・チベット族の少女（帽子は男物です）：小学6年生とは思えない自信と希望に満ちた眼差しの通り、学業優秀で格上の州都に有る康定中学校へ進学しました。

（四川省丹巴 2003年5月 撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三）

'わんりい' 2023年1月号の目次は16ページにあります



新年のご挨拶

日中文化交流市民サークル'わんりい'代表
寺西 俊英

わんりい会員・会友の皆さま、新年あけましておめでとうございます。皆様方におかれましては新たな希望を胸に新しい年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

先日会員である友人から「わんりい」とは何ですか？と訊かれました。わんりいの12月号を中国語教室に通っている方にお渡ししたところ、その方から訊かれうまく答えられなかったと言われるのです。私は〈万里の長城〉の万里を中国語読みで「わんりい」と発音することで命名したものですよ、と答えはしました。が、「万里」とした意味を前代表の田井光枝さんから詳しく聞いたことがありませんでしたので私なりの解釈を述べようと思います。わんりいは1992年8月1日が設立の日と規約に載っています。そうです！昨年がちょうど創立30周年でした。30年前に何人かの京劇のお好きな方たちが集まって、わんりいが発足したと聞いています。

ところで「わんりい」の持つ意味ですが、まず広辞苑で「万里」と引くと「一万里ほどの極めて遠い距離」とあります。当時の一里は4kmもなかったわけですが、それにしても山海関から甘粛省の嘉峪関までの長城は2400kmもの長さで、人工衛星から見える人類が築造した唯一の建造物と聞いた記憶があるほど長大なものです。つまり「わんりい」は幾久しく連綿と続く組織であって欲しい、また遠く離れた地域や国々(特に中国)との文化や歴史をお互いに尊重し理解して行こう、との思いで名付けられたように思えるのです。

わんりいは昨年が創立30周年にあたるので30周年記念号の発行とか何かお祝いの催しをしたいな、と胸中に抱えておりましたが果たせず、このように新年のご挨拶でご紹介するのみとなってしまう、申し訳ない気持ちでおります。言い訳になりますが、コロナの感染者が増減を繰り返し、催しには慎重にならざるを得ませんでした。また8月号は休刊月でありそれも言い訳の一つかと思えます。

話を戻すようですが、1992年の発足時から25年の長きにわたり田井さんが代表をされて来られましたが、傘寿になられたころから次期代表のお話をされるようになり5年前に私にバトンタッチされました。田井さんの人脈の広さ、活動の幅の広がりにより個人会員は80名を超え、わんりいの発行部数も200部を超えており会員の他、関係する諸団体にもお送りして喜ばれています。この新年号で280号となります。設立してしばらくは年10回まで発行していませんでしたので本来であれば300号ですが280号あります。わんりいは会員・会友からのみの寄稿で280号を数えるのですから会員・会友の方々のご協力は一方ならぬものがあります。是非まだ寄稿されたことの無い方もお気軽に原稿をお寄せください。万里の長城の如く、これからも500号1000号と末長く続けるつもりです。

最後に今年の活動予定の概要を述べたいと思います。まず新年会はこのご挨拶の脱稿の時点では開催の是非の結論が出ていませんでした。開催の有無は新年号の後方、「みんなの広場」欄に記載しますのでご覧ください。漢詩の会は先生のお身体の具合を見ながら原則月1回、ボイストレーニングは通常通り月1回の開催です。先日行われた「まちカフェ」や「サークル祭り」などイベントへの参加は、主催者が開催を決めれば参加する予定です。またコロナの関係で控えて来ました「料理の会」は状況を見ながら再開したいと考えています。

新年会が開催できれば一番いいのですが、もし開催できない時は、2022年に考えていたように、折を見て、会員の皆さんの親睦を図る機会を作りたいと考えています。今度こそ、コロナに邪魔されないで開催できるようにと念じています。

本年が皆様にとりまして幸多き年となり、更なるご健康とご活躍を心から祈念しまして新年のご挨拶とさせていただきます。

李清照の〈詞〉声声慢(上)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

李清照は誰もが認める中国文学史上最高の女性詩人です。特に〈詞〉の分野では、細やかで個性的な抒情表現に長け、南唐の後主李煜と並んで現代中国でも絶大な人気を博しています。

北宋末期の1084年、今の山東省済南市で文人の娘として生まれ、18歳で3歳年上の〈金石文〉研究家趙明誠と結婚。聡明で学術・文芸の才に恵まれ、陰に陽に夫の研究を支える傍ら、時に二人で酒を酌み交わし、また詩を唱和したり、公私にわたって当時としては稀に見る幸せな結婚生活を送っていました。

そこへ一大惨事が襲い掛かります。北方女真族の侵攻により首都汴梁が陥落、宋王朝は長江を渡って南遷します。いわゆる靖康の変です。

一家は貴重な蔵書拓本、書画骨董をはじめ家財道具の殆んどすべてを戦火で失い、一時は夫婦別れ別れになります。後に再会。漸く元の生活に戻れたのもつかの間、夫は48歳で早世します。



李清照像、清代の崔錯画・北京故宮博物院蔵

(ウィキペディアから)

今回取り上げる作品は、夫亡き後の辛くやるせない思いを訴えたものとされています。〈詞〉としてはやや長い作品なので上下二回に分けて連載します。

まずはその個性的な表現を味わってみましょう。

shēng shēng màn

声声慢

lǐ qīng zhào

李清照

xún xún mì mì lěng lěng qīng qīng

寻寻觅觅冷冷清清

qī qī cǎn cǎn qī qī
凄凄惨惨戚戚

zhà nuǎn huán hán shí hòu
乍暖还寒时候

zuì nán jiāng xī
最难将息

sān bēi liǎng zhǎn dàn jiǔ
三杯两盏淡酒

zěn dí tā
怎敌他

wǎn lái fēng jí
晚来风急

yàn guò yě
雁过也

zhèng shāng xīn
正伤心

què shì jiù shí xiāng shí
却是旧时相识

- * 声声慢=楽曲(詞牌)の名称。
- * 寻觅=探し求める。
- * 冷冷清清=ひっそりとしたさま。
- * 凄凄=物寂しいさま。
- * 惨惨=辛く悲しいさま。
- * 戚戚=心が痛むさま。



李清照紀念堂・済南市(ウィキペディアから)

- * 乍暖还寒 = 急に暖くなったりまた寒くなった
り。「还」は口語では hái とよむ。
- * 将息 = 気が休まる。
- * 三杯两盏 = 二、三杯の酒。少量の酒。
- * 怎敌他 = ととても敵わない。
- * 旧时相识 = 旧知の仲。

〔訓読〕

せいせいまん りせいしょう
声声漫 李清照 (1084-1155)

たず たず もと もと
尋ね尋ねて、覓め覓むるも、

冷冷清清たり

せいせい さんさん せきせき
凄凄たり、惨惨たり、戚戚たり

たちま あたた ま さむ じこう
乍ち暖かくして還た寒き時候

もっと しょうそく がた
最も将息し難し

さんはいりょうさんあわ
三杯両盞淡き酒

いか これ てき
怎で他に敵せん

ばんらいかぜきゅう
晚来風急にして

かり す
雁の過ぐるや

まさ
正に心を傷むましむ

かえ こ きゅうじ そうしき
却って是れ旧時の相識なれば

亡き夫の面影を、追い求め求めても追い求め
ても、辺りはひっそり、物音ひとつしない。時は

秋、寒暖の差が激しく心は安まらず、淡い酒を
二、三杯啜ったぐらいでは如何ともし難い。夕
べになると風も強まり、北の空から雁がやって
来る。あの雁は失われた故郷の地から来たに違
いない。だとすれば旧知の仲だ。それにつけても
彼の地で亡き夫と幸せに暮らした日々が偲ば
れ、却って心が痛む。

〔和訳〕

呼び求め、求め探せど

せき
寂として返る声無く

わび
傷ましく、やるせなく、また侘し

かんだん つねな おり
寒暖の常無き時節を

いかん しの かつ
如何とも凌ぐに難く

いささ あわ あお
些かの淡き酒をば呷れども

まま
身は儘ならず

ゆう つの
夕されば風の募りて

か かり きた
彼の地より雁の来るに

いた
我が心まさに傷めり

なじ
これぞ馴染みの仲なりしかば

「寻寻」「觅觅」「冷冷」「清清」「凄凄」「惨惨」
「戚戚」…。劈頭から重ね字が7回も連続して出
てきます。同じ詞牌〔声声漫〕の中でもこういう
例は珍しく、絞り出すような作者の悲痛な思い
を伝えると同時に、とても斬新な響きを感じら
れます。

また末尾の3句「雁过也」「正伤心」「却是旧
时相识」は一見何気ない雁の描写ですが、夫との
死別の悲しみの底に、亡国の恨みが込められて
いるようにも思えます。

これは言わずと知れた、日本の童謡「待ちぼうけ」の基のお話で、日本語で「守株待兔」と読むそうです。しかし、四字成語としてより、童謡としての方がずっと親しまれていますね。

・>・>・>・>・>

昔、農夫が畑仕事をしていた丁度その時、突然森の中からウサギが、何かに追われているように猛烈な勢いで走って来て、大きな樹の切り株に頭をぶつけて死んでしまいました。

農夫は何もしないでウサギを手に入れたので嬉しくなり、そして考えました：「俺にもツギが回って来たな。思いがけずウサギを手に入れたぞ。ひょっとしたら、明日も飛び出してきて、この切り株にぶつかるウサギがいるかも知れないぞ」

それ以降、この農夫は畑仕事をせずに、毎日あの樹の切り株の近くに座って、日がな一日ウサギが飛び出してきて、あの日のようにぶつかって死ぬのを待っていました。

しかし、待っても、待っても、ウサギは出て来ませんでした。何もしないで待っている間に、畑の雑草は作物よりも大きく育ってしまいましたが、彼は二度と再び、切り株にぶつかって死んだウサギを手に入れることはできませんでした。

・>・>・>・>・>

言葉の意味：株＝樹の切り株。努力しないで僥倖を期待する気持ちを表す。

使い方：彼は毎日、切り株の前で待っている。働かないで利益を得ようなんて考えるべきではない。

・>・>・>・>・>

これは、戦国時代の思想家韓非子の著作「韓非子・五蠹篇」に出てくるお話です。現在この言葉は、

努力しないで利益を求めるとか、「棚ぼた」を期待すると言った意味に使われることが多いようですが、もともとは「旧態依然とした因習にとらわれ、改革には目を向けない」あるいは「一つ事に捉われて、他に目を向けることが出来ない視野の狭い」人たちを批判したものだそうです。

2021年7月号のこのコラムで紹介した「刻舟求劍」と同系列のもので、融通が利かないとか視野が狭いという意味を表す四字成語なのです。

韓非子は、戦国時代の弱小国「韓」の公子でした。宰相を務め、国を強くしたいと画策しましたが、

周りの人々の理解が得られず、失意のうちに職を辞しました。自分の考えを著作として残そうと考え「韓非子」という本が出来たそうです。「韓非子」は譬え話が面白く、主張がはっきりしていて理解しやすいと思います。

韓非子は、司馬遷の「史記」によると、後に秦の宰相となる李斯と同じ頃に、性悪説を唱える儒家・荀子の弟子として学んだようです。このことは傍証が少なく、異説もありますが、一般的には広く信じられています。

大国秦の宰相となった李斯が、隣接する小国韓を秦の郡県制に組み込むことを提案し、韓非子が抗弁するために秦に派遣されました。以前から韓非子の書物を読んで彼を評価していた秦王は、韓非子を召し抱えようとしませんが、韓非子が召し抱えられれば、将来自分の地位を脅かされると考えた李斯の讒言により、韓非子は投獄され、最後には李斯が差し入れた毒薬で自殺したと伝えられています。

本当に、古代中国の歴史は、テレビドラマよりもドラマチックですね。



挿絵：満柏画伯



波のり兎
宮城県民芸品

ことわざに見る『卯年』と兎

寺西俊英

新年あけましておめでとうございます。今年は干支の四番目に当たる“卯年”ですね。卯の方角は、東にあたり、昔の時刻（卯の刻）ではおよそ今の午前六時を言います。十二支はすべて動物が当てはめられています。昨年の「寅」は「虎」の字が当てられているように、卯は兎が当てはめられています。ここで年の初めに当たり中国の卯年にまつわる諺を拾い集めてみました。漢字は中国から伝来し、文化や風俗習慣も中国の影響を強く受けていますので両国で共通して使う諺がたくさんあります。では早速見て行きましょう。

■守株待兎

♪待ちぼうけ、待ちぼうけ、ある日せつせと野良稼ぎ、そこへ兎が飛んで出てコロリころげた木の根っこ♪ という唱歌（童謡）を私は「卯年」と言えば思い出します。この歌は私の小さい頃よく聞いたものですが、今時の幼稚園や小学校では教えているのでしょうか？ 北原白秋作詞、山田耕筰作曲の「待ちぼうけ」という歌ですが、この歌は満州移住者の要望を受けて、1924年（大正13年）に満州唱歌の一つとして発表されたものです。

以下は「四字成語」と偶然重なりましたが、ちょっと詳しく見てみましょう。この「守株待兎」は、戦国時代の宋の国の農夫に関する故事です。ある日いつものように畑を耕していたところ、兎が飛んできて木の切り株にぶつかって動かなくなったのです。兎の所に行って見ると首の骨を折って死んでいました。思わぬ拾い物、占めたとばかり、来る日も来る日も鋤を放り出して畑仕事はせず、切り株を見張っていたのですが、とうとう兎は現れず人々の笑いものになったという話です。出所は中国の法家の思想書「韓非子」の中の説話から来ています。富国強兵を目指して、法家思想に則った政治を行おうとする勢力に対して、変革を好まず、従来型の政治を護ろうとする勢力を批判する文脈の中で用いたものです。要は、「偏狭な経験にしがみつき、状況に応じた柔軟な考え方が出来ないこと」の喩として使われるものです。

■逐二兎者不得其一

逐は「追いかける」と言う意味です。漢字を見ればおよそその意味が分かると思いますが、「二兎を追う者は一兎をも得ず」です。日本でもよく使う諺ですね。「違った二つのことを同時にしようと欲張ってもどちらもうまく行かない」という意味です。中国人の友人に聞きますと、中国では似ている諺に、「脚踏両只船」という諺があり「二股をかける」と言う意味だそうです。今年の抱負を聞かれたら一つに絞った方がよさそうですね。

■始如処女后如脱兎

これは、「初めはおとなしく弱々しく見せて敵を油断させ、後には見違えるほど素早く動いて敵に防御する暇を与えない」という策略です。日本でも「初めは処女の如く終わりは脱兎の如し」と使いますね。「脱兎」とは、動作の迅速なことの喩です。この諺は全13編からなる兵法書「孫子」の中の「九地」にある言葉で、戦いの時の戦法の一つだということです。

■狡兎死走狗烹

日本でも「狡兎死して走狗烹らる」と使われますね。これは「すばしっこい兎が捕らえられて死んでしまうと、今まで兎を捕まえるために走り回った猟犬もいらなくなって煮て食われてしまう」という諺です。元は敵が亡びるとそれに貢献した武将や大臣が殺されてしまう場合に使われていたようです。この故事としてはいくつかありますが、次に挙げる故事がすぐ頭に浮かびます。

〈春秋時代、越王の勾踐が呉を滅ぼした後、越王はそれまで国のために力を尽くしてきた范蠡を追放し、大臣の文種を殺してしまった。范蠡はやがて自分も殺されると考え、北の斉に逃げて名を変えて商人となり、莫大な財を築いた〉という話です。これも偶然ですが、越王勾踐も范蠡も先月と今月掲載の「西施と館娃宮」に登場しています。

このように中国で生まれた諺が日本でもそのまま使われることが多く、日中の文化的つながりの深さと長さを強く感じます。

「中原経済区」ふたたび

文と写真＝村上直樹

新型コロナの蔓延を受けて厳しい行動制限を伴う対策を講じてきた中国においても、ようやく緩和の兆しが見える(2022年12月中旬時点)。今年は3年ぶりに中国旅行ができそうである。新型コロナの来襲とほぼ同時期の2020年春に始めたこの「雑感」を続けながら、中原にも行きたいところが新たに出てきたので、ぜひ実現したいと思っている。

ところで、この「雑感」では一時期、中原地域の発展を目指す国の構想である「中原経済区」の建設を話題として取り上げた(2021年4月、5月、6月、7月、11月号)。とくに、6月号からは「『中原経済区規畫』を読む」と題して、今からちょうど10年前の2012年12月2日に国家発展改革委員会から発布された『中原経済区規畫(2012～2020年)』(以下、『規畫』)をつまみ食いの紹介した。しかし、あらためて「雑感」を読み返すと、2021年11月号で第九章の第5節に触れたところで途切れてしまっている。それから1年以上経ってしまったが、今回はまず、同『規畫』の残りの部分について章の下の節を訳出する形で、ともかくもこの話題を一旦終わらせることにしようと思う(『規畫』全体の目次は、すでに2021年5月号に掲げたが、今回再掲した)。

『中原経済区規畫(2012～2020年)』の目次(再掲)

前言(まえがき)
第一章 発展基礎(発展の基礎)
第二章 総体要求(全体的要求)
第三章 空間布局(空間配置)
第四章 推進新型農業現代化(新型農業近代化の推進)
第五章 加快新型工業化進程(新型工業化過程の加速)
第六章 加快推進新型城鎮化(新型都市化推進の加速)
第七章 建設現代化基礎設施(近代化インフラ施設の建設)
第八章 加強生態環境保護和資源節約利用(生態環境保護と資源の節約利用の強化)
第九章 建設和諧中原(調和のとれた中原の建設)
第十章 促進區域聯動發展和開放合作(區域の連動した發展と開放的提携の促進)
第十一章 創新“三化”協調發展體制機制(“三化”協調發展體制メカニズムのイノベーション)
第十二章 規畫實施保障(計畫實施の保障)

『中原経済区規畫(2012～2020年)』の第10-12章

【第十章】

第1節 優化区域内分工合作(区域内の分業と提携の質を高める)

第2節 支持開展區域合作示範(區域提携モデルの展開を支持する)

第3節 密切与其他經濟區聯系(他の經濟區との關係を密接にする)

第4節 發展內陸開放型經濟(內陸の開放的經濟を發展させる)

第5節 建設鄭州航空港經濟綜合實驗區(鄭州空港經濟綜合實驗區を建設する)

【第十一章】

第1節 推進關鍵環節先行先試(鍵となる部分を先行して試すことを推進する)

第2節 深化重點領域改革(重點領域の改革を深化させる)

第3節 完善政策支持體系(政策による支持體系を整備する)

第4節 開展“三化”協調發展創新示範(“三化”協調發展革新モデルの展開)

【第十二章】

第1節 加強組織協調(組織的協調を強化する)

第2節 強化監督檢查(監督と檢查を強化する)

「第十章」の節立ては表に示したとおりである。最後の「第5節」について若干補足したい。この『規畫』は、正式な公表に先立って同じ年の11月7日に國務院の承認を得ているが、その際、併せて「鄭州航空港經濟綜合實驗區」の建設という計畫も同意されている。これは鄭州國際空港(鄭州新鄭國際機場)を中心に物流・産業の拠点形成して中原地域の發展につなげようという構想であり、2013年3月に正式に発足し、現在に至っている。

この実験区の核となる鄭州國際空港は1997年8月に完成して運用が開始された(前身の小さな空港は1950年にできている=『百度百科』による)。その後、施設・路線の拡張が続けられ、成田空港との間の直行便も2015年8月25日に「中国南方航空」が週3便の運航を始めた。私も河南行の際、それまでは北京空港から国内線に乗り換えるか、鉄道あるいは長距離バスを利用していた。いずれにしても接続の問題などから成田空港周辺あるいは北京市内で宿泊することが多かった(高速鉄道が開通する前は夜行列車も利用した)。直行便の開通後は、成田・鄭州間が4時間前後で結ばれ、たとえば開封市へもその日の内に着くことができる(ただし、鄭州空港からの帰国便は朝が早いので、開封市内に宿泊して朝方空港に向かうのはかなり厳しい)。なお、成田以外にも、大阪(関西国際空港)、名古屋(中部国際空港セントレア)、静岡と

鄭州との間が直行便で結ばれているはずであるが、現在は新型コロナの影響でかなり不規則な運行状況のようである。

『規劃』に戻って、つづく「第十一章」はこの計画の骨格である「三化」、すなわち「都市(城鎮)化」、「工業化」および「農業近代化」の協調的発展の実現過程について記述されている(「三化」それぞれの内容については、第四、五、六章で詳述されている)。この「三化」という目標は、当時、中原だけではなく全国的に推進されようとしており、とくに一大農業地帯であって人口も膨大な中原地域(2011 年末時点で1.79 億人)が、そうした政策のモデルになり得ると見做されていた。そこでは、一部の地域のみが中原経済区に含まれる他の省(河北省、山西省、安徽省、山東省)と違って、省の全域がそこに含まれる河南省(狭義の「中原」)が主体的な役割を果たすよう期待されている(第4節)。

『規劃』はその計画の実現を担保する仕組み、その進捗状況を評価することの必要性を記した「第十二章」で終わっており(ただし、具体的内容はほとんど無く、また、記述も短い)、これで「雑感」の『中原経済区規劃』を読むのも一区切りつけることができた。

実は、今回の本題はここからである。中央政府公認による中原経済区の設立は河南省をはじめとするこの地域にとって長年の悲願とも言えるものであり、2012年12月以降しばらく「中原経済区」という言葉は、政府関係者の発言、マスコミ等にも盛んに登場する流行語であった。すでに述べたように、当時、私はたまたま河南省・開封市に2か月ほど滞在していたので、その祝賀ムードを直接感じる事ができた。

その後、私も中原経済区に関心を持ってきたつもりであるが、やがて、この話題を見聞きする機会が減ってきたように感じていた。とくに、2021年5月号の「雑感」で書いたように2016年12月、国家発展改革委員会より発布された『中原城市群發展規劃』において「中原城市群」の地理的範囲が「中原経済区」とほぼ同じになり、そのころからもっぱら「中原城市群」という言葉を多く目にするようになった気がする。

それにしても『規劃』は2万字を超える分量に、かなり具体的な内容を盛り込んだ本格的な計画であり、いくつかの指標については数値目標も明記されていた。計画達成の目標年次は2020年に設定されており、2021年にはその評価を巡って報告なども発表されるものと予想していたが、私の知る限り、そうし

た動きは見られなかった。

毎年発行される『河南經濟發展報告(河南藍皮書)』を見ても、2019年版(2019年6月、社会科学文献出版)には河南省社会科学院課題組が「2018年中原經濟区省轄市經濟綜合競爭力評估」と題して中原經濟区の現状を報告する文章を寄せていたが、2020年版以降には中原經濟区に関する報告は見当たらない。目下、2012年時点では全く予期されていなかったパンデミックという状況下にあるとは言え、中原經濟区の話がほとんど消えてしまったのを不思議に思っていた。

もちろん私の知る範囲は限られており、「中原經濟区」という言葉がほとんど使用されなくなったということに確信がある訳ではなかった。しかし、ごく最近のネット記事によると、そうした私の印象はどうやら正しかったようである。12月8日付の河南省関連サイト『豫記』に喻新安氏による「時隔六年、省委書記重提中原經濟区、意味深長」(6年の時を経て、[河南省[共産党]委[員会]書記があらためて中原經濟区を提起した。意味深長である)という文章が掲載された。洛陽出身の喻氏は、河南中原創新發展研究院院長などを務め、『中原經濟区研究』(2010年、河南人民出版社)など多数の関連書籍を著しているこの分野の主導的研究者の1人である。

喻氏による文章の標題は、9月6日に河南省委書記の楼陽生氏が「鄭州航空港經濟綜合実験区」を視察した際、この実験区をもって「打造中原經濟区和鄭州都市圈核心增長極」(中原經濟区と鄭州都市圈の中核的成長の極を打ち立てる)と述べたことを指している。そして、6年前の2016年8月、当時の河南省委書記の謝伏瞻氏がやはり鄭州航空港区を視察した折、中原經濟区について同様の発言をしており、これらの事実をもって、6年の時を経て河南省のトップが再び中原經濟区を提起したと、喻氏が述べているのである。逆に言うと、この間、中原經濟区について言及されることはなかったということになる。

喻氏によると、あれほど熱く語られていた中原經濟区が、人々の視野から次第に消え、公開の場でほとんど口にされなくなった理由は、全国的な地域發展の方向性が「經濟区」から「城市群」に移ったからである。その中で、今回の楼書記による中原經濟区への言及は、なぜ意味深長であるのか。新しい年を迎え、果たして中原經濟区の復権があるのか、喻氏の主張をもう少し追ってみたい。(つづく)

西施と館娃宮(2)

訳：一瀬靖子／大槻一枝

ある時、呉王と西施は山の頂から茫々と霞む太湖を展望した。西施は太湖を遠く望み、太湖の向こうにある越国を懐かしんだ。そして一旦事あるときのために、近道を知っておく必要があると考えた。

彼女は呉王に、「湖の手前に小さい山がありますが、何と言う山ですか？」と尋ねた。

「あれは香山だ」

「なぜ香山と言うのですか？」

「私が部下に命じて越国から香草を取って来させ、あの山に植えたのだ。香草から香水を作り、そなただけに使わせているのだぞ。それで香山と言うのだ」。

西施は笑い顔を拵えながら（館娃宮に来て見せた「半分」の笑い）尋ねた。「香山にはどう行くのでしょうか？」

「ここから歩いて木洩まで下山し、そこから船で行くと香山だよ」と聞いて、西施は頭を横に振った。「そんなに大回りをしては遠すぎます」。

呉王はこれを聞き、すぐ供の者に弓矢を用意させて、香山に向けてヒョーと放った。それと同時に命令書を部下に渡し、「矢の進む方向に川を開け！」と命じたので、山のふもとから館娃宮まで

運河が掘り進められた。呉王は西施を伴って遊覧船に乗り、笙を吹きながら香山まで行き、香草取りを楽しんだ。川には蓮が植えられ、兩岸には楊柳、桃の木が植えられていた。霊岩山から見下ろすとまっすぐに伸びた川は、今日、“箭香涇”、“箭香”、“箭涇河”、“采香涇”などと称されている。

西施は呉王の酒色に溺れた生活を利用し、事あるごとに、呉国の財力を消耗させ、人民の恨みを買ひ、民心を失わせようと図ったが、ある時、彼女は呉王に言った。「西施は生まれつきの美人だと人々に言われますが、自分では見ることが出来ません」。

呉王はすぐ山頂に井戸を掘らせ、「井戸を鏡に見ればよかろう」と言った。山上に井戸を掘るのは容易ではない。井戸掘りに駆り出された人々の間には不平不満が渦巻いた。この井戸は、今も霊岩山の頂に“呉王井”として残されている。

西施は一日千秋の思いで越軍が攻め来る日を待ち、越の拳兵に合わせて周到な準備を行った。

木洩には“山上には十八の名所があり、山下には十八の影がある”と言う言い伝えがある。十八の影とは木洩にある十八の井戸を指す。井戸は西施が掘らせたものと言われ、西施の深謀遠慮を表している。越兵が攻め入る時に、飲み水として使えるようにと掘らせたのである。聞くところでは、越兵が侵攻してくる直前に、それぞれの井戸には糲が撒かれたという。

西施はなぜ井戸を掘らせ、井戸水を越兵の飲料に使おうとしたのか？ 井戸水は川の水より清潔だからである。では、なぜ井戸に糲をいれたのか？ それは、井戸水が冷たいので、戦って汗にまみれた越兵が急に井戸水を飲んで、腹痛を起こすことを恐れたからである。水の中に糲が浮かんでいれば、飲む前に手で糲を掻き分けたり、息で糲を吹き散じたり、少し時間を掛けねばならない。こう



木の間からの太湖の風景（ウィキペディアより）

して飲んだ水なら、腹痛を起こすことは少ない。
兵士の健康は勝利するための第一条件である。

“十年生聚、十年教訓”の諺の通り、越王勾践は兵を大挙して呉の国に向かわせた。呉王夫差は、文官武将と共に酒色に溺れ、何の防備もなく、気付いたときには越兵に十重二十重に囲まれていた。そこで、呉王は死を覚悟し、部下に申し付けた。「私が死んだら赤い布で私の顔を覆ってくれ。私は黄泉の国へ行って、伍子胥に会わせる顔がない」。

伍子胥は呉王に対し幾度となく、越王の報復に警戒するように諫言していた。しかし呉王は耳を貸さず、伍子胥は「自分が死んだら、首を刎ねて城頭に掲げよ、城門から越兵が攻め入るのを見たい」との言葉を残して既に死んでいた。

伍子胥の心配は現実のものとなり、呉王が悔いたところで、もう取り返しがつかなかった。この辺りでは、今でも人が死ぬと顔を赤い布で覆う風習があるという。

越王勾践は念願どおり呉国を滅ぼしたが、彼は共に困難を克服するには信頼のおける相手であっても、楽しみを共有することが出来ない人物であった（と范蠡も記している）。有頂天になり、疑い深くなった。呉国を滅ぼした後、越王が西施に褒賞を与えようとしたが、それに対して、越王の妻は強く反対した。「西施と言う女は、強大な呉国を

亡ぼした人物です。今日、彼女の人望は貴方より高い。もし、彼女が心変わりすれば、今とは反対に、貴方に歯向かうことになるでしょう。怖いと思わないのですか？」。

越王はこれを聞いて、西施を亡き者にする決意を固めた。西施を伴って船に乗り、太湖の中程まで来ると彼女を縛り上げ、大きな石に結わえて、湖に沈めるよう、部下に命じた。

西施は「私は衷心から国に尽くしました。なぜ、私を殺すのですか？」と訊いたが、部下は「越王様が、西施は人間社会に置けない人物だと仰っている」と言うが早く、西施を湖に突き落とした。

范蠡が館娃宮に西施を迎えに来たが、無駄足になった。彼は西施が越王に殺害されたことを知り、自分も危ういと知って無錫に隠居した。彼が住んだところが、現在の「無錫蠡園」である。

訳者による補足：

西施は長江に沈められ、その後、蛤がよく獲れ、人々が西施の舌だと噂した事から、中国では蛤を「西施の舌」とも呼ぶようになったという。

范蠡は西施を連れて越国を脱出し、斉国に逃げて共に暮らした、という伝説や、また、范蠡は斉国では「鴟夷子皮」、その後、曹国に移ってからは「陶朱公」と名前を変えて、いずれの地においても商売で大成功を収め巨万の富を得て、悠々自適の暮らしを送ったという伝説も残っている。

「史記」の「貨殖列伝」に「陶朱の富」の故事として描かれている。（おわり）



范蠡の肖像（ウイキペディアより）



蘇州市にある西施橋（ウイキペディアより）

<横浜開港>

1858年に日米をはじめ、日蘭、日露、日英、日仏の5ヶ国と修好通商条約が結ばれ、翌1859年7月1日(安政6年6月2日)、神奈川・長崎・函館の3港が開港した。当時の徳川幕府の大老・井伊直弼なおすけは、江戸城に住む将軍の安全をはかるため、首都の江戸(東京)から見て神奈川宿より、なお遠く、東海道筋から外れた戸数百に満たない寒村の横浜を、“横浜は神奈川の一部である。”と詭弁を使って、開港することにした。

これが思いがけず良い結果をもたらし、横浜は急速に発展した。横浜開港を聞いて、ひと儲けを目論んだ欧米系貿易商社がどっと進出して来た。しかし、欧米人は日本語が判らず、日本人もまた欧米の言葉が判らないが、広東、香港、上海の欧米商館で働いていた中国人は、欧米の言葉が判り、日本人とは漢字で筆談が出来た。そのため欧米人は中国人を伴って横浜にやって来た。だから、中国人は、初め欧米人の貿易の仲介者、通訳、使用人として来日した。来日外国人で一番多かったのが、条約を締結していない中国人だったのである。

やがて、北海道産のアワビ、昆布などの海産物を買付け、中華料理の材料として香港や上海に輸出し、砂糖を台湾から輸入したりする商人や西洋建築、ペンキ塗装、洋裁、活版印刷、西洋料理などの様々な技術を持った中国人たちが続々来日し、横浜に住んだ。中国人は横浜新田と呼ばれた田圃を埋め立てて造成された山下町に集中して住んだ。

中華街の海側に、1923年(大正12年)に発生した関東大震災のガレキなどで海を埋め立てて造られた「山下公園」が1930年開園した。「山下公園」には、薔薇の咲く花壇があり、“赤い靴を履いた女の子”をはじめとする銅像や歌碑が多く、また岸壁には戦前の日本で建造された唯一の貨客船“氷川丸”も係留保存されており、話題に事欠かない。因みに氷川丸は、2016年、国の重要文化財に指定された。小型遊覧船で港内をクルージングし、潮風を頬に受けながら横浜の歴史に想いを巡らせ



山下公園と氷川丸

るのも悪くない。下船したら、中華街でお腹を膨らませてみてはいかが？

<中華街の形成>

横浜中華街は、東西南北のどの方角から行ってもカラフルで豪華絢爛な牌楼が迎えてくれる。これらは中華街の玄関口であり、シンボルとも言える。中華街大通りの西側入り口に赤門と呼ばれる「牌楼門」が、1955年最初に建てられた。表側に“中華街”と書いたことから、この街は「中華街」と呼ばれるようになった。それまでは、“唐人街”とか、“南京町”とかと呼ばれていた。この牌楼は、1989年リニューアルされ、内側に“親仁善鄰”と書かれたので、「善隣門」と呼ばれるようになった。

今、門は全部で10基もある。中国では皇帝が王城を築く際、城内に邪が入らないように通路に門衛を置くのが常だった。門には各方位を司る守護神を置いて邪の侵入を防ぎ、城内の繁栄と安全を祈った。中華街も小さな城と考えられる。日清和親条約が結ばれた1871年以降、来日する中国人が増えて中華街が形成された。華僑社会は、地縁・血縁的結びつきが強固であり、広東、上海、福建、北京、台湾など同郷ごとに住む地区も作られて行った。元々「住宅街」だったが、1950年代半ばから「グルメの街」へと傾斜を強め、今では料理店ばかりが目につく。“当たるも八卦当たらぬも八卦”の占いの店も増えた。



中華街大通り

10 基の牌楼に囲まれた約 400 メートル四方の一郭は、現在 600 の店舗が立ち並ぶ東アジア最大の中華街に発展した。2004 年 2 月 1 日横浜駅から延長されて、みなとみらい線の開通と同時に終点駅の名前が、『元町・中華街』と名付けられたことも横浜中華街が一層 PR される要因になった。150 年続く横浜の中華街は、今では日本社会にすっかり溶け込んでいる。

< 関帝廟・媽祖廟 >

中国から海外に移住した中国人とその子孫たちを華僑と呼ぶが、横浜中華街で商売を営む彼らが信仰するのは、1871 年（明治 44 年）に建立された「関帝廟」だ。華僑の守り神である「関帝廟」は、1923 年の関東大震災、1945 年の太平洋戦争末期の米軍空襲、1986 年の失火で 3 度も倒壊・焼失という受難の歴史を経て、現在の「関帝廟」は 1990 年に開廟した 4 代目である。「関帝廟」の主神は武将・関羽を神格化した関聖帝君である。『三国志』によれば、関羽は、前漢王朝の血筋を引いた劉備を蜀漢の皇帝に擁立するが、曹操と孫権の連合軍に敗れて処刑されてしまう。一方、劉備が軍師として“三顧の礼”をもって迎えたのが諸葛亮である。同じ劉備に仕えた関羽と諸葛亮の二人だが、諸葛亮は年上の関羽を敬遠していたようだ。

中国人は、私心のない忠義剛勇の武将・関羽が好きなのに対して、日本人は、優れた外交力のある臨機応変のブレン・諸葛亮の方を好ましく思う。とは私の推測だが、同感する人は多い。

南門の朱雀門近くに、2006 年に出来た「媽祖廟」は、航海の安全を守る媽祖と言う女神を祀っている。媽祖は北宋時代（960～1127 年）に福建省に実在したといい、16 歳の時、神から教えと銅製の御札を受けられ、神通力を使って雲に乗って巡回し、御札の力で悪霊や災いを退け、人々の病を癒し、安産の神様と言われている。中国の正月は、旧暦の春節で、華僑たちは関帝廟、媽祖廟に初詣に

行く。人の波と歓声と爆竹の音の中で獅子舞が奉納される。街に 44 も銅鑼や太鼓が打ち鳴らされ、龍舞、獅子舞が繰り出す。更に、中華人民共和国の独立記念日（国慶節）である 10 月 1 日と、中華民国の建国記念日（双十節）である 10 月 10 日にも大きな祭事が繰り広げられ、中華街一帯は賑わう。今年は 3 年ぶりに実施され一際にぎやかだった。

< 華僑の学校 >

横浜中華街には、2 つの華僑学校がある。関帝廟の近くにある『横濱中華學院』（中華民国系）と JR 石川町駅の近くにある『横浜山手中華学校』（中華人民共和国系）である。どちらも孫文が、1897 年にヨーロッパより来日し、華僑学校設立を提唱したのに呼応したものだ。設立の経緯、その後の進展などは微妙に異なるようで、それぞれのホームページに詳しく書いてある。

華僑学校は、国民党内の対立や辛亥革命、国共内戦、関東大震災、日中戦争、東西冷戦などの影響を受け、校名や所在地を含めて幾多の分裂や変遷があった。

1949 年毛沢東により中華人民共和国が建国され、中華街の華僑にも「大陸系」と「台湾系」の概念が生まれ、華僑学校も対立・離反した時期もあった。しかし、1986 年関帝廟が全焼したあと、大陸系も台湾系も手を結んで再建に協力し、張り合うのを止めた。2 つの学校は、共に中国語・日本語・英語を学び、中国文化・芸能を大事にする、地域に根差した学校となった。

< 孫文と中華街 >

ところで、孫文（1866 年～1925 年）は、1911 年の辛亥革命以前、清朝打倒の武装蜂起に失敗し、日本での亡命生活のうち、約 6 年間を横浜で暮らした。出入国を繰り返したが、主な住所は横浜中華街の朱雀門に近い山下町 121 番地。太平道と市場通りの交差点の東南に位置する。ここには孫文の支援者で、茶の貿易や両替商を営む同郷（広東省）の華僑・温炳臣（1866 年～1955 年）の 2 階建てのレンガ造りの家があり、孫文はここに隠れ住んだ訳だ。その頃、中国は愛新覚羅の清朝であり、横浜中華街に居た中国人の大半は、満州族の習慣である辮髪をしていたが、温炳臣は、孫文に倣って辮髪を切り落としている。

■184 話 時間も貸さない

超ド級のケチンボがいました。

ある時、隣人が彼の土地を借りでパーティーを開きました。それを見た人が、ケチンボの使用人に訊きました：

「今日は、珍しくあんたの主人がパーティーをしているのかね？」

使用人は、口をへの字にゆがめて答えました：

「私の主人がパーティーなんて、一生待ってもありませんや！」

それを聞きかじったケチンボが言いました：

「誰が待つんだ！ そんな時間は貸してやらんぞ！！」

■第 185 話 屋根の修理

秋の長雨が続いて、部屋中で雨漏りが始まりました。息子と妻が主を急かせて言いました：

「早く屋根屋さんに修理してもらいましょうよ。これ以上雨が続くと、家中水浸しですよ」

主は早速屋根職人を呼んで修理させました。

修理には丸一日かかりましたが、修理が終わった次の日は、太陽が燦燦と輝く秋晴れでした。

主は、青空を眺め、屋内を見回し嘆きました：
「ああ、何という不運。折角屋根を修理したのに、雨がやんでしまった。お金の無駄使いだったな！」

■第 186 話 金槌を借りる

二軒の家が並んで建っていて、両方共にケチンボが住んでいました。

ある日、片方の家で、父親が子供に、隣へ行って金槌を借りてくるようにと云いつけました。

子供が隣の家に行き、金槌を借りたいという

と、隣人は：

「金槌で叩くのは木の釘かね、金の釘かね？」

子供が「金の釘だ」と答えると、隣人は、道具箱を覗きながら言いました：

「や、残念だな。帰ってお父さんに言いなさい。『うちの金槌はおじいさんに貸して、未だ返して貰ってないので貸せない、申し訳ない』と」

子供は家に帰って一部始終を告げると、父親が憤慨しながら言いました：

「まったく手に負えないケチンボだな！ 他人に金槌を使わせるのが惜しいんだな」

その後考えながら、顔を顰めて言いました：

「仕方ない、家にある金づちを使うか！」

■第 187 話 命より金儲け

金儲けの好きな男が、トラに啜えられ、連れ去られようとしていました。

息子が父親を助けようと、慌てて弓矢を構えてトラを射ようとする、父親は、トラに啜えられながら言いました：

「息子よ、息子！ トラの足を狙うんだぞ！ 体に弓の穴が開くと、毛皮の値打ちが下がるからな！」

■第 188 話 半分殺す

金儲けが好きで、金儲けのためなら何でもやるつもりの男がいました。

ある人が彼をからかって言いました：

「1000 両あげると言ったら、私を殴り殺すことができるかい」

彼は冗談とは思わず、真剣に考えました。彼を殺してしまったら、金は払ってもらえない。長い間考えてから答えました：「半殺しにするから、500 両払って下さいよ！」

みんなの広場

わんりい「まちカフェ」に参加

木ノ内 せつ子

第16回町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ！」通称「まちカフェ！」は、11月26日(土)～12月2日(金)に開催された。22年度のまちカフェテーマは、「仲間とつくる新たな未来～エールをつなごう心のブレンド～」。

わんりいは、3年ぶりの市庁舎会場3階に出店した。物品販売は、モンの小物に加えて、今年は、会員の手作り小物や中国滞在中に集めたものも並べた。3年前に来てくれた人が、「その説明、以前にも聞きましたよ」と言いながら、また顔を見せてくれたり、「以前、ここで買ったのよ」と言って、使い込んだポーチをバッグから取り出して見せてくれる人がいたり、門の小物=わんりいとの印象は定着してきたようだ。

水墨画のワークショップは、満さんの手本を見ながら2023年の干支の、人参を抱えたウサギや、親子のウサギを描いたが、好評だった。特に子どもたちの絵は、個性豊かな楽しい作品に仕上がった。ウサギから連想されたのか、満月や月見団子を描き加えるなど、見ている側も楽しかった。

満さんの、筆の穂先の整え方、水の含ませ方、濃淡の出し方など、丁寧な指導も良かった。午前1

回、午後2回、各回4名40分だったが、予約もできて満席だった。

物品販売や水墨画に直接関係ない、わんりいの通常活動について質問する人もいて、中国語講座や漢詩の会の紹介もした。1階正面玄関前では、農産物の販売、竹灯籠展示・ワークショップ、丸太切り体験などもあったのだが、残念ながら見学できなかった。キッチンカーも来ていたとか…。



満柏画伯のご指導に注目する参加者たち



水墨画教室で作品を仕上げる参加者



可愛いウサギさん一家が描けました

●2023年わんりい新年会の中止のお知らせ

2023年の新年会は、1月22日(日)を予定しておりました。この日は春節なので丁度良いと決めたとおりましたが、2022年12月頃から第8次といわれるコロナ感染の波が押し寄せて来ました。感染拡大のピークは1月中旬に来ると言われているのも気になる処です。

感染拡大のピークも回を重ねると予測より早く来て、早目に収まったりすることも考えられます。それに何より、かなりのピークが来ても、行政が行動規制をかけることは控えるかもしれないという楽観論も出ました。

しかし、わんりいの新年会は、シュワンヤンロウでおしゃべりをするのが最大の楽しみです。それに対して、コロナの特性は、感染しても発症まで数日間のタイムラグがある事、発症前から感染力がある事などです。これだけ蔓延しているコロナウイルス、誰がどこで感染するか分かりません。誰か一人がこの状態で新年会に参加する可能性を想定した時、シュワンヤンロウのような、いわゆるビュッフェスタイルでは、感染阻止の有効な対策は思いつきません。

3年ぶりにみなさんとの交流の場を設けたいとの思いは強いのですが、予防対策が立てられないという危険は、主催者としてはちょっと見過ごせない事態です。

それでよくよく検討の結果、残念ながら今年も、新年会開催を断念することに致しました。本当に残念ですが致し方ありません。皆様方には、事情をお汲み取り頂きご了承いただきたいと存じます。コロナの収まった時点で、何らかの形で懇親会を催したいと思えます。

昨年も同じように考え、機会を狙っておりました。感染が少し収まった時点で発案し、検討を加えているうちに、状況が悪化して、皆様にご案内するまでには至らなかったことが再三ありました。その意味では、コロナに翻弄された一年だったと言えるでしょう。

今年こそ、何らかの形で懇親会を開催し、皆様の元気なお姿に接したいものと考え、一日も早いコロナの終息を祈念致します。

🎉 新年会中止 残念!! 🎉

吉光 清

新型コロナ第8波の恐れから「新年会」の企画は中止となってしまいました。これで3年連続の中止ということになります。前回は2020年2月2日(日)の開会で、都内でコロナ感染者が最初に確認された1月23日の後でしたから、際どいタイミングでした。その時の盛会の模様が、「わんりい251号」に掲載されています。定番料理「シュワンヤンロウ」で十分に空腹を満たしてからの余興タイムは「フルーツ演奏」「マジック」「二胡合奏」「バイオリン演奏」「ビンゴ大会」など盛り沢山の内容で圧倒されました。2018年に単身赴任先から引き揚げてきた小生は、「わんりい料理教室」に参加したことを契機に、「漢詩の会」「中国語初級教室」と徐々に参加の幅を広げ、その後の「新年会」までフル参加でした。お腹いっぱい食べ、ビンゴの景品や、余りの食材をいただいて、“次回も必ず”と思いつながら会場を後にしたことを思い出します。新年会に限らなくても、可能になったら“シュワンヤンロウで懇親会を!”と無芸大食の私は願うのですが。

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

今月も一茶の句をどうぞ

めでたさも

中くらいなりおらが春

小林一茶

chú jiù yíng xīn nián
除 就 迎 新 年

suí yì dù chūn tiān
随 意 度 春 天

【わんりいの催し】
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：1月24日（火）10：00～11：30
2月21日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：1月8日（日）10：00～11：30  
2月は休講になります
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）  
Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■ 1月・2月・3月定例会 代表宅

- ▼ 1月9日（祝）13：45～
- ▼ 2月9日（木）13：45～
- ▼ 3月9日（木）13：45～

■ 'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼ 2月 休 刊
- ▼ 3月号 未 定

☆☆ 編集後記 ☆☆

明けましておめでとうございます。新しい年、2023年を皆様はどのように迎えられましたか？ きっと平穏で楽しいお正月を迎えられたことでしょう。

幸いなことに、私共は穏やかなお正月を迎えられますが、全国規模で見れば、原発事故で故郷を追われて、未だに落ち着かない日々を送る方々がおられます。また最近各地で頻発する気象災害に苦しむ方々も少なくありません。そんな皆様が少しでも気の休まるお正月を迎えられるようにと願いますが、何も出来ず、歯がゆい思いが募るばかりです。

眼を世界に転じてみると、理不尽な言い分で始まった戦争や内戦、宗教をめぐる争いなど、どうなるか心配なことが山積です。

新しい年には、世界中の争いごとが収まり、コロナも終息するようにと、淡い期待を抱きながら祈念するしか術はありません。

~~~~~

'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

'わんりい' 280号の主な目次

新年のご挨拶	2
「日译诗词」(29) 李清照〈詞〉声声滿(上)	3
寺子屋 四字成語(59)『守株待兔』	5
卯年のことわざ	6
「中原」雑感(28)「中原経済区」ふたたび	7
「西施と館娃宮」(2)	9
『中華街』	11
「中国の笑い話(53)」	13
みんなの広場	14
'わんりい'の催し・お知らせ	16